

株主通信

89号

WINTER 2013

特集

2014年3月期 第2四半期決算報告

目次

株主の皆さまへ	1
連結決算ハイライト	2
主要事業別レポート	3
クローズアップ —大日本スクリーン70周年： 思考展開の軌跡—	5
(要約)連結財務諸表	9

Fit your needs, Fit your future

期待に応えて、未来を形に...

70th
Anniversary

SCREEN NOW



取締役会長 最高経営責任者 (CEO)
石田 明

取締役社長 最高執行責任者 (COO)
橋本 正博

株主の皆さまにおかれましては、平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。当社は2013年10月11日に設立70周年を迎えました。株主の皆さまに改めて感謝申し上げます。設立70周年に際しまして、本誌では「大日本スクリーン70周年：思考展開の軌跡」を5～8ページに掲載していますので、ご高覧いただければ幸いです。

ここに2014年3月期第2四半期累計期間（2013年4月1日～2013年9月30日）の業績および今後の取り組みに関しまして、ご報告いたします。

※本誌に記載されている業績見通しなどの将来に関する記述は、当社が現時点において入手している情報および合理的と判断する一定の前提に基づいており、今後の世界経済やエレクトロニクス業界の技術変化、半導体・FPDパネルの市況などにより、実際の業績などと大きく異なる可能性があります。

2014年3月期第2四半期累計期間の業績

当上半期における当社グループを取り巻く事業環境は、半導体業界におきましては、普及が進むスマートフォンやタブレット端末に関連する設備投資は増加しましたが、需要が減少しているパソコンに関わる投資は抑制されました。液晶パネル業界におきましては、中小型パネルの需要増や中国での設備投資再開など事業環境に改善が見られました。このような状況の中、当社グループの売上高は1,111億円と前年同期に比べ16億円（1.5%）増加しました。利益面では、固定費、変動費の削減に努めたことから、営業利益は30億円（前年同期は12億円の営業損失）、経常利益は26億円（前年同期は14億円の経常損失）、四半期純利益は15億円（前年同期は69億円の四半期純損失）と、それぞれ黒字化しました。

通期業績の見通し

半導体機器事業における好調な受注状況から、通期業績予想を前回予想（8月9日発表）から上方修正し、売上高2,270億円、営業利益78億円、経常利益70億円、当期純利益51億円といたしました。

また、2014年3月期の年間配当は、前回予想どおり、1株当たり3円（期末配当金）を予定しております。

当社グループとしましては、変動費削減を中心とする収益改善に向けた取り組みを継続する一方で、保有技術の強化と新規事業への展開を通じて80周年、100周年と持続的に成長できる企業体質の構築を目指してまいります。

株主の皆さまにおかれましては、今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

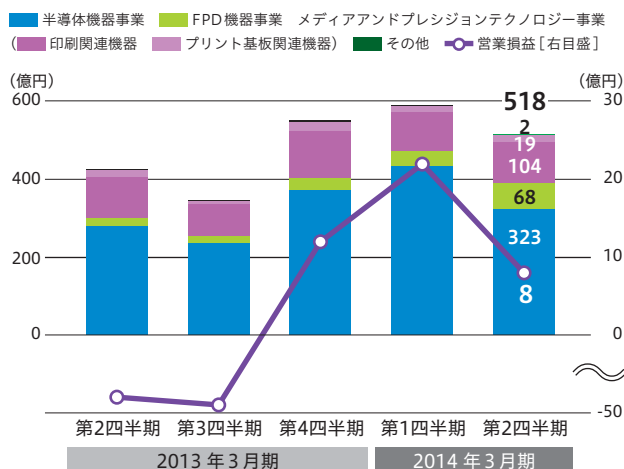
取締役会長 最高経営責任者 (CEO) 石田 明
取締役社長 最高執行責任者 (COO) 橋本 正博

2014年3月期連結経営成績

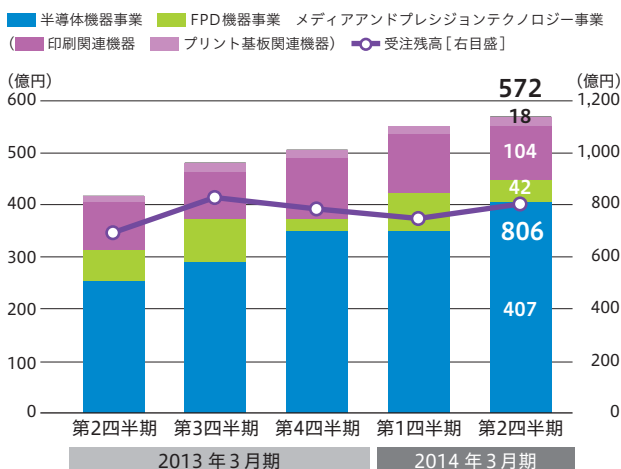
(単位：億円未満切捨)

	第1四半期 2013年4月1日から 2013年6月30日まで	第2四半期 2013年7月1日から 2013年9月30日まで	前年同期 2012年7月1日から 2012年9月30日まで	第2四半期累計期間 2013年4月1日から 2013年9月30日まで	前年同期 2012年4月1日から 2012年9月30日まで
売上高	593	518	428	1,111	1,094
営業損益	22	8	△44	30	△12
経常損益	22	3	△47	26	△14
四半期純損益	16	△1	△89	15	△69

売上高・営業損益



受注高・受注残高



2014年3月期連結業績予想

(単位：億円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
通期	2,270	78	70	51

配当予想

2014年3月期の期末配当につきましては、1株当たり3円を予想しています。

(注)1. 財務数値につきましては、金額は表示単位未満を切り捨て、比率は四捨五入して表記しております。

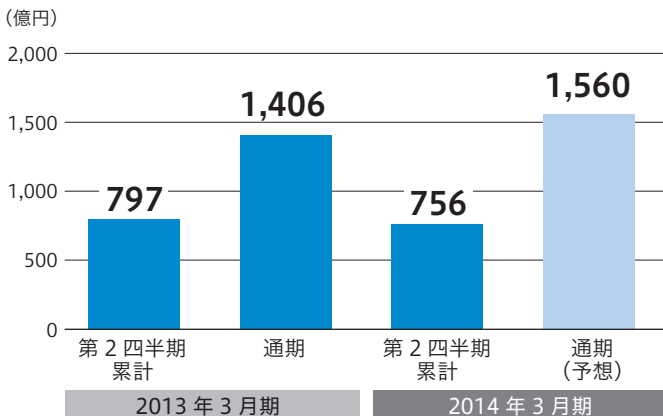
2. 半導体機器事業およびFPD機器事業の装置販売について、従来、出荷基準により収益を認識しておりましたが、2014年3月期より、据付完了基準により収益を認識する方法に変更したため、前年度実績の関連する項目については、本誌では当該会計方針の変更を遡及適用した数値を記載しております。

主要事業別レポート

半導体機器事業

当期の業績(第2四半期累計期間)

売上高 **756億円(前年同期比5.1%減少)**



メモリーや大手ファンドリーの投資拡大により、コーターデベロッパの売上は前年同期と比べ増加しましたが、ロジック向けの売上は大幅に減少しました。

営業利益 **28億円(前年同期は7億円の営業損失)**

売上高は減少しましたが、変動費や固定費の削減努力により、前年同期と比べ36億円の改善となりました。

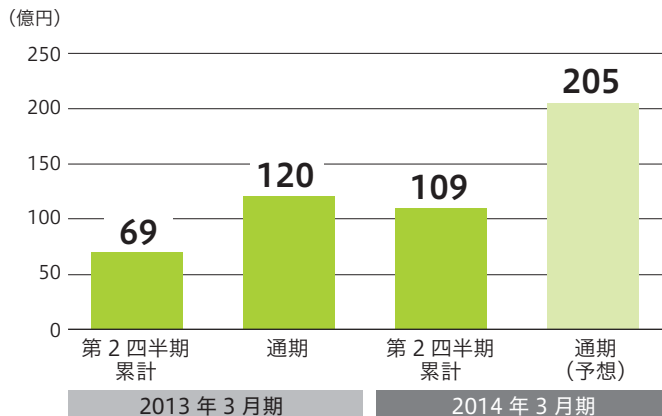
今後の見通しと取り組み

スマートフォンやタブレット端末の普及を背景にファンドリーの活発な設備投資は続くと予想されます。事業環境の改善を追い風に、製品力の強化やコストダウンを進め、収益拡大を図ります。

FPD 機器事業

当期の業績(第2四半期累計期間)

売上高 **109億円(前年同期比58.8%増加)**



国内やアジア向けに高精細液晶パネル向け中小型製造装置の売上が増加したことに加え、中国向けの大型パネル用製造装置の売上が増加したことから、前年同期に比べ大幅な増加となりました。

営業利益 **1千万円(前年同期は3億円の営業損失)**

売上が大幅に増加したものの、工場操業度の低下とプロダクトミックスの影響により、小幅な改善にとどまりました。

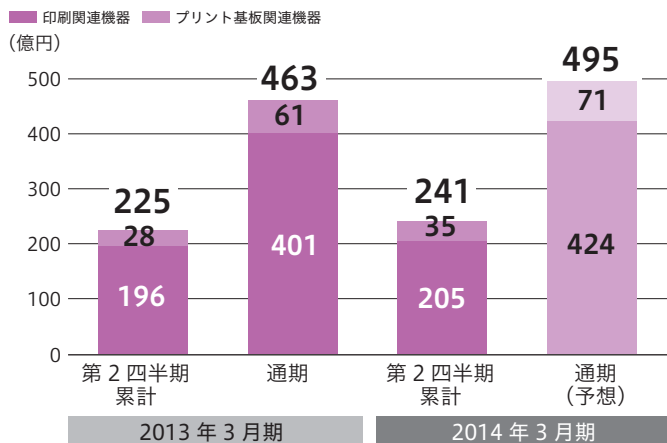
今後の見通しと取り組み

中国での大型商談の獲得による受注増加が見込まれます。有機ELテレビの本格投資時期が遅れ気味ですが、太陽電池やリチウム電池の製造装置など新規事業の早期立ち上げにより、来期以降も見据えた収益基盤の強化に取り組めます。

メディアアンドプレジジョンテクノロジー事業

当期の業績(第2四半期累計期間)

売上高 241億円(前年同期比7.0%増加)



印刷関連機器：205億円

CTP装置の売上は減少しましたが、POD装置の売上が増加したことにより、前年同期に比べ4.6%の増加となりました。

プリント基板関連機器：35億円

「Ledia(レディア)シリーズ」を中心とした直接描画装置が好調により、前年同期に比べ24.0%の増加となりました。

営業利益 10億円(前年同期比45.8%増加)

売上の増加や変動費率の改善により、増益となりました。

今後の見通しと取り組み

印刷関連機器のうち、POD装置においては、ラベルプリンターの新製品投入などによりアプリケーションの拡大を図ります。CTP装置では、新興国向けに製品ラインアップを充実し、中国でのシェア拡大を狙います。

プリント基板関連機器では、直接描画装置において、好調な韓国や日本に加え、台湾や中国での販売にも注力します。

用語解説

メモリー：半導体の一種で、データを記憶する。

ファブリー：半導体の受託生産を行う企業。

コーターデベロッパー：半導体製造プロセスのうち、フォトレジスト(感光剤)の塗布と現像を行い、集積回路の形成時に使用される装置。塗布現像装置ともいう。

ロジック：半導体の一種で、演算や命令などを行う。

変動費：生産量や販売数量の増減に応じて変動する費用のこと。原材料費や荷造運賃費、外注費など。

固定費：生産量や販売数量の変化に関係なく、一定期間に一定額発生する費用のこと。人件費、減価償却費、研究開発費など。

CTP：Computer to Plateの略。印刷するデータをコンピュータから印刷用プレートに出力し、印刷版を作成する方法。

POD：Print on Demandの略。必要なときに必要な部数を印刷すること。

直接描画装置：回路パターンを高速・高精細に直接描画(露光)する装置。従来の露光方式に比べ、納期の短縮やコストの大幅な削減が可能。

クローズアップ ー大日本スクリーン70周年：思考展開の軌跡ー

大日本スクリーンが1943(昭和18)年10月11日、株式会社として設立されてから、70周年を迎えました。

創業以来、ガラススクリーン蝕刻*技術から、光学、画像処理、エレクトロニクス、露光、塗布、現像、洗浄など多岐多様な技術に応用展開してきた歴史は、まさに「思考展開」の軌跡であったといえます。

※化学薬品などの腐食作用を利用した表面加工の技法。エッチングともいう。

1868～1942

ガラススクリーンの国産化



創業当時の「石田旭山印刷所」

1943～1980

「世界の大日本スクリーン」として、製版機器からエレクトロニクス分野へ事業を拡大

印刷機器事業

カラーの時代に合わせた画像情報技術に注力

Turning Points

1943年

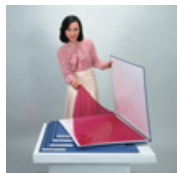
大日本スクリーン製造所から、大日本スクリーン製造株式会社を設立
終戦の翌年から写真製版用カメラ、焼付機などの生産を開始



当時の社屋

1957年

コンタクトスクリーンの国産化に成功(翌年生産開始)



コンタクトスクリーン

1964年

国産初の実用的な電子製版彫刻機「オートグレーバー」を開発以降、大量印刷に貢献する製品を次々と開発



オートグレーバー

1970年～

カラーの時代

1965年以降、国産カラーフィルムの普及が進み、1970年代以降は映画・写真でもカラーが主流となりました。

電子機器事業

テレビ時代の到来を見据え、電子機器事業に進出

1955年

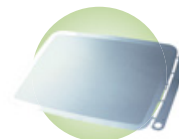
ガラススクリーンの製造技術に応用してテレビの撮像管用の金属部品ターゲットメッシュの生産に成功
エレクトロニクス分野へ参入



ターゲットメッシュ

1960年

カラーテレビ用シャドウマスクの試作に着手(1963年生産開始)



カラーテレビ用シャドウマスク

1964年

東京オリンピック開催

戦後日本の復興の象徴となった五輪開催を機に、カラーテレビの普及が進みました。

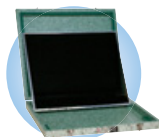
技術を確立、写真製版機器の総合メーカーへの第一歩を踏み出す

1868年

現会長・石田明の曾祖父である石田才次郎（銅版画家）が石田旭山印刷所を創業

1934年

石田才次郎の次男である石田敬三が写真製版用ガラススクリーンの国産化に成功



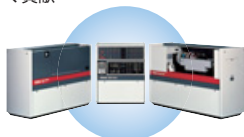
ガラススクリーン

1937年

石田旭山印刷所の中に、大日本スクリーン製造所を設立、翌年ガラススクリーンの生産を開始

1974年

国産初のダイレクトカラーキャナー「SG-701」を発売
カラーキャナーの普及に大きく貢献



SG-701

印刷技術から電子機器事業へ

フォトリソグラフィー（写真蝕刻）

写真現像技術を応用してパターンを形成する技術。当社の画像処理技術の根幹をなす。大日本スクリーンは、フォトリソグラフィー技術を応用して、印刷機器事業から電子機器事業へ事業展開した。

1970年

超精密自動製図機「AD-401」を開発
プリント基板業界での存在を確実なものにした



AD-401

1975年

IC製造用エッチング装置「EMW-322」を開発



EMW-322

1976年

液晶ディスプレイ製造用表面処理装置を開発・販売（現・ウェットステーションの原型）



液晶ディスプレイ製造用表面処理装置

1978年

IC製造用スピンドーター「SCW-421」を開発
フォトレジストコーティング処理工程に本格進出

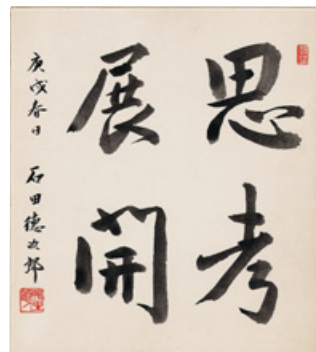


SCW-421

「時代のニーズに合わせて進化できる企業集団へ」

当社は、「思考展開*」のDNAを継承し続け、国内外に45社、約5,000人を擁する企業グループとなりました。21世紀に入り、技術革新が加速する中、これからも歴史を重ねていくために、「思考展開」の精神で常に進化できる企業集団を目指します。

※「思考展開」とは、研究開発型企業として生まれた大日本スクリーンの事業展開の信条です。常に「自社の技術や製品にどう結びつくのか」「何が不足しているか」を考え、新しい事業や製品の創造にチャレンジを続けるという強い思いが込められています。



1981～1993

フォトリソグラフィ技術をベースに半導体・液晶事業に本格進出

印刷機器事業

画像処理・デジタル製版システムに事業を展開

1981年

日本初のカラー製版用画像処理システム「シグマグラフ2000」を開発



シグマグラフ2000

1993年

DTP対応の印刷製版用統合システム「レナトス」を開発



レナトス

Turning Points

1980年～

IT革命・DTP革命

コンピューターの本格的普及により、業務のIT化が加速。また、1986年にはデスクトップパブリッシング(DTP)という言葉が誕生。印刷業界革命の幕開けとなりました。

電子機器事業

半導体装置を中心とする電子機器事業を拡大

1982年

ウエハー洗浄装置(ウェットステーション)、出荷増洗浄ビジネスを本格スタート後に大日本スクリーンの主力製品の一つに

1986年

プリント基板欠陥検査装置「OPI-2600」を開発
現在の検査装置の礎に



OPI-2600

1990年

光学式外観検査システム「OPI-5000」シリーズを投入



OPI-5220

1993年

電子機器の売上高が印刷機器を抜く

パーソナルコンピューターの普及に伴い、半導体生産が急増。半導体製造装置メーカーとして大日本スクリーンが大きく飛躍するきっかけとなりました。

TOPIC 2013

Cell³iMager

高速3D細胞スキャナーを発売
ライフサイエンス分野に参入

当社独自の画像処理技術を応用した3D細胞スキャナー「Cell³iMager(スリー・ディー・セル・イメージャー)」を2013年7月から販売しました。

同機は、がん細胞の増殖や形態変化を、検査試薬なしで高速に計測・分析することを実現。従来の検査装置では困難だった簡便で正確ながん細胞の観察を可能にし、実際の生体環境に近い条件での創薬研究を強力に支援します。



Cell³iMager

1994～beyond

グループの技術開発力を結集して、次世代の新技术・新事業の創出を目指す

印刷機市場に参入、フルデジタル化に対応

1995年

イメージセッター「DT-R3100」「FT-R3050」を投入



FT-R3050

1998年

サーマル対応のCTP「PlateRite(プレートライト)8000」を発売
暗室作業が不要になり、作業環境が一変



PlateRite 8000

2000年

米アップル社と「Mac OS X」の開発で提携、大日本スクリーンが開発した日本語フォント「ヒラギノ」が採用される

2006年

フルカラーバリアブルフルジェット印刷機「Truepress Jet(トゥループレスジェット)520」を発売



Truepress Jet520

1997年

300ミリウエハー対応のワンパス式ウエハー洗浄装置「FC-3000」を発表
洗浄装置のトップメーカーに



FC-3000

2000年

多品種小ロット生産に適した300ミリウエハー用スピンドルセッター「AQUASPIN(アクアスピン)MP-3000」を発売



MP-3000

2003年

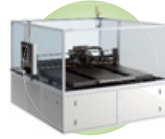
独自の塗布技術リニアコーター®を開発
高集積化・超微細化に対応した枚葉式洗浄装置「SU-3000」を発売



SU-3000

2009年

太陽電池パネル用膜厚測定装置「RE-8000」を発売
エネルギー分野に参入



RE-8000

2011年

プリント基板直接描画装置「Ledia(レディア)5」を発売
回路の描画(露光)工程を大幅に合理化



Ledia 5

(要約)連結財務諸表

連結損益計算書

(単位：百万円未満切捨)

科目	第2四半期累計期間	
	2014年3月期 2013年4月1日から 2013年9月30日まで	2013年3月期 2012年4月1日から 2012年9月30日まで
① 売上高	111,141	109,466
売上原価	84,546	87,177
売上総利益	26,595	22,288
販売費及び一般管理費	23,560	23,573
② 営業利益(△損失)	3,034	△1,284
営業外収益	693	566
営業外費用	1,107	732
③ 経常利益(△損失)	2,620	△1,450
特別利益	10	0
特別損失	5	1,120
税金等調整前四半期 純利益(△損失)	2,626	△2,570
法人税等	1,084	4,314
法人税等合計	1,084	4,314
少数株主損益調整前四半期 純利益(△損失)	1,542	△6,885
少数株主利益(△損失)	△17	27
④ 四半期純利益(△損失)	1,559	△6,913

連結包括利益計算書

(単位：百万円未満切捨)

科目	第2四半期累計期間	
	2014年3月期 2013年4月1日から 2013年9月30日まで	2013年3月期 2012年4月1日から 2012年9月30日まで
少数株主損益調整前四半期 純利益(△損失)	1,542	△6,885
その他の包括利益	4,387	△2,928
包括利益	5,929	△9,814
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	5,936	△9,843
少数株主に係る包括利益	△6	29

ポイント

① 売上高

半導体機器事業の売上が減少しましたが、FPD機器事業の売上が増加したことにより、売上高は1,111億円と前年同期に比べ16億円増加しました。

② 営業利益

変動費や固定費の削減により、営業利益30億円(前年同期は12億円の営業損失)を計上しました。

③ 経常利益

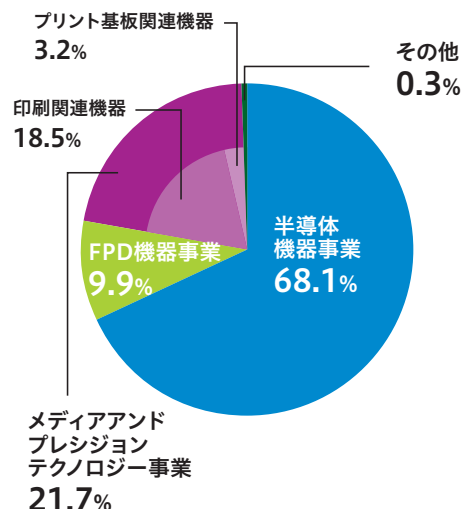
経常利益は26億円(前年同期は14億円の経常損失)となりました。

④ 四半期純利益

四半期純利益は15億円となり、繰延税金資産の取り崩しが発生した前年同期(69億円の四半期純損失)に比べ大幅に改善しました。

事業セグメント別売上高構成比

(2014年3月期 第2四半期累計期間)



連結貸借対照表

(単位：百万円未満切捨)

科目	第2四半期末	
	2014年3月期	2013年3月期
	2013年9月30日現在	2013年3月31日現在
(資産の部)		
流動資産	162,132	161,614
固定資産	74,190	70,776
有形固定資産	39,542	39,902
無形固定資産	2,615	2,624
投資その他の資産	32,031	28,249
5 資産合計	236,322	232,390
(負債の部)		
流動負債	123,875	120,013
固定負債	29,670	35,521
6 負債合計	153,546	155,535
(純資産の部)		
株主資本	84,345	82,788
その他の包括利益累計額	△2,162	△6,539
少数株主持分	593	605
7 純資産合計	82,776	76,854
負債純資産合計	236,322	232,390

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円未満切捨)

科目	第2四半期累計期間	
	2014年3月期	2013年3月期
	2013年4月1日から 2013年9月30日まで	2012年4月1日から 2012年9月30日まで
8 営業活動による キャッシュ・フロー	7,695	△1,081
9 投資活動による キャッシュ・フロー	△2,800	△2,891
10 財務活動による キャッシュ・フロー	△5,650	△2,974
現金及び現金同等物の 四半期末残高	38,201	27,811

※詳細な財務諸表に関しましては、下記のウェブサイトより、平成26年3月期第2四半期決算短信をご覧ください。

<http://www.screen.co.jp/ir/library/2014.html>

ポイント

5 資産合計

たな卸資産や有形固定資産などが減少しましたが、受取手形及び売掛金や投資有価証券などが増加したことにより、前期末に比べ39億円増加し、2,363億円となりました。

6 負債合計

社債を発行した一方で、借入金を返済したことなどにより、前期末に比べ19億円減少し、1,535億円となりました。このうち、有利子負債は54億円減少し、649億円となりました。また、有利子負債から現金及び預金を除いた純有利子負債は59億円減少し、240億円となりました。

7 純資産合計

四半期純利益計上による利益剰余金の増加に加え、保有株式の時価上昇および円安の影響により、その他の包括利益累計額が増加したことから、前期末に比べ59億円増加し、827億円となりました。この結果、当第2四半期末の自己資本比率は、前期末に比べ2.0ポイント上昇し34.8%となりました。

ポイント

8 営業活動によるキャッシュ・フロー

税金等調整前四半期純利益、減価償却費、たな卸資産の減少などの収入項目が、売上債権の増加などの支出項目を上回り、76億円の収入となりました。

9 投資活動によるキャッシュ・フロー

研究開発設備等の有形固定資産を取得したことなどにより、28億円の支出となりました。

10 財務活動によるキャッシュ・フロー

社債の発行による資金調達の一側で、借入金を返済したことなどにより、56億円の支出となりました。

株主メモ

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月
基準日	定時株主総会 3月31日 剰余金の配当 3月31日 (当社は中間配当制度を採用しておりません。)
単元株式数	1,000株
公告方法	電子公告により、当社ウェブサイト (http://www.screen.co.jp/)に掲載いたします。 ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告ができない場合は、日本経済新聞に掲載いたします。
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
同事務取扱場所	大阪市中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
郵便物送付先	〒168-0063 東京都杉並区和泉二丁目8番4号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部 電話 0120-782-031(フリーダイヤル) 取次事務は、三井住友信託銀行株式会社の本店および 全国各支店で行っております。
(電話照会先)	

1. 「特別口座」に記録された株式をお持ちの株主さま

株券電子化までに証券保管振替機構(ほふり)に株券を預託されなかった株主さまの株式は、当社が三井住友信託銀行に開設しました「特別口座」に記録されています。特別口座では、株式の売買が制限されておりご不便かと存じますので、証券会社に開設されました一般口座へ振替されることをお勧めいたします。お手続きの詳細は上記の三井住友信託銀行にお問い合わせください。

2. 単元未満株式をお持ちの株主さま

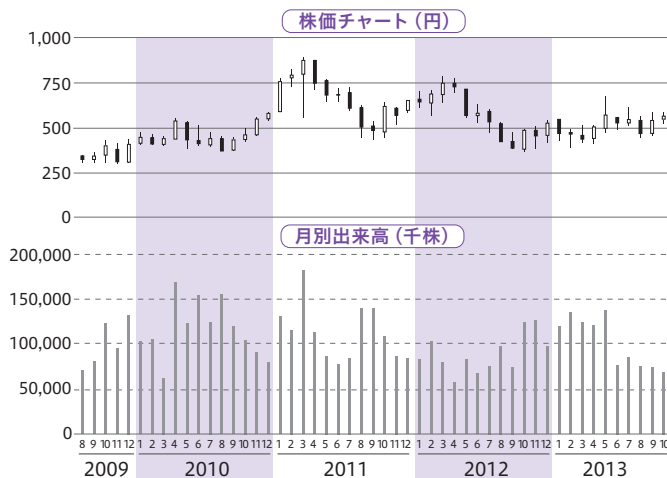
当社に対して、次の請求を行うことができます。

【買増請求】 単元株式(1,000株)に不足する株式の買増し

【買取請求】 単元未満株式の買取

お手続きの詳細は、お取引の証券会社(特別口座が開設されました株主さまは、三井住友信託銀行)にお問い合わせください。

株価および出来高の推移

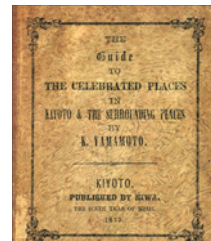


明治・京都博覧会のレプリカ版『京都案内書』

明治6(1873)年、第2回京都博覧会のために発行された外国人向けの『京都案内書』。NHK大河ドラマ『八重の桜』の主人公、新島 八重の兄・山本 覚馬らが英文原稿を作成し、当社会長、石田 明の曾祖父・石田 才次郎(雅号は石田 旭山)が挿絵を描いた貴重な書物です。当社はレプリカを製作しており、このたび多くの方に見てもらえるよう当社ウェブサイトに掲載しました。

以下のサイトからご覧いただけます。

<http://www.screen.co.jp/profile/guidebook.html>



大日本スクリーン製造株式会社

〒602-8585 京都市上京区堀川通寺之内上る4丁目天神北町1-1 電話075(414)7111
<http://www.screen.co.jp/> 証券コード7735

SCREEN NOW Vol.89 発行日:2013年12月12日(発行は3月、6月、9月、12月) 発行:広報・IR室

「SCREEN NOW」(株主通信)は、当社のフォント「ヒラギノ書体」を使用しております。

UD FONT
by HIRAGINO

見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。

